

*Lutèce*第26号抜刷
1996年12月31日発行

『聖ユスタッシュ伝』の韻文版と散文版
——十三世紀の二版について——

小栗栖 等

大阪市立大学フランス文学会

『聖ユスタッシュ伝』の散文版と韻文版

—十三世紀の二版について—

小栗栖 等

1. 本論の対象と目的

『聖ユスタッシュ伝』は八世紀初めに既に存在していたギリシャ語版に起源をもち、最古のラテン語訳は少なくとも十世紀には存在していた。そして、そのラテン語訳に端を発して多くの俗語訳がフランスで成立した。我々は、その内の二つ、すなわちベテルサンとミュレが校訂した、十三世紀の韻文訳と散文訳を考察対象とする¹。この二つの版(version)を特にとり上げるのは、両版が興味深い対照をなすように思われるからである。「韻文版」についても、「散文版」についても、校訂者はともにラテン語原本に忠実に従っているとしており²、しかも十三世紀中葉以前というほぼ同時代的な成立年代を与えている。それゆえ、この二版を比較することで、散文と韻文の質的な違いを検討することが可能になろう。両版は、いわば異なった環境で成長した双子なのである。

とはいえ、そうした比較検討を行う前に、まず、両版がいかなる関係を持つのかをはっきりとさせておかねばならない。双子と見えた両版が親子や従兄弟だったという可能性もなきにしもあらずである³。一方が他方に強い影響を与えていたり、いずれかの

1. *La Vie de Saint Eustache — Poème français du XIII^e siècle—*, édition d'Holger Petersen, Champion, Paris, "C.F.M.A.", 1928 (以下ではこのテキストを「韻文版」と呼ぶ。)

La Vie de Saint Eustace — Version en prose française du XIII^e siècle—, édition de Jessie Murray, Champion, "C.F.M.A.", 1929 (以下ではこのテキストを「散文版」と呼ぶ。)

本論中の作品引用はすべて上の刊本から行った。強調はすべて引用者によるものである。

2. ミュレは「散文版」が「原本からの直接の翻訳」(*ibid.* p. iii)だとし、「翻訳者はラテン語写本5577のテキストに酷似するテキストに忠実に従っている」(*ibid.* p. vi)と述べている。一方、ベテルサンも「韻文版」に関して、「この詩の直接の原本はモンブリティウス(Mombritius)の刊行した『聖ユスタッシュ伝』のラテン語版である」と言い、「詩の作者は原典に忠実に従っている」(*ibid.* p. xii)としている。

3. もちろん、前註に引用したベテルサンとミュレの言葉を蔑ろにしようというわけではない。我々も、両者と同様、問題の二版がラテン語原本からの独立した二種の翻訳だということを信じているが、現時点ではそれは仮説に過ぎない。というのも、校訂者達は、自分たちの刊行した作品が「原本」に直接基づいていると主張する際に、その根拠にほとんど言及しないからである。

版が別の俗語訳のリライト版であったりした場合には、比較検討に相当程度のバイアスがかかることになる。同様に、両版の成立年代が五十年も隔たっているようでは、やはり不都合が多い。そこで本論では、「散文版」と「韻文版」の関係、そして両版とラテン語原本¹の関係を考察し、さらには両版の成立年代を検討した上で、上記のような比較考察の足がかりを整えておくことにする。

2. 「散文版」と「韻文版」の関係

二つの俗語訳と「ラテン語版」を概観するだけで、ほぼ確実に思われることがひとつある。それは、「散文版」は「韻文版」から派生したものであるということである。なぜなら、「散文版」は、ほとんどの部分が文単位で「ラテン語版」と対応しており、その意味ではほぼ完全な直訳だからである。ここで、「ほぼ」と言わねばならないのは二つの理由による。まず第一に、後でも検討するとおり、「散文版」と「ラテン語版」の間にも、語のレベルでは際だった相違が存在しているからである。そして第二に、たった一カ所であるが、「散文版」には「ラテン語版」にない長い記述が見られるからである。異教徒の皇帝によって迫害を受けたユスタッシュとその一家が最終的に処刑される闘技場は、「散文版」では次のように描かれている。

L'areinne si estoit une mult grant place en Rome ou li vallet jooient a l'escremie e les damoiseles i faisoient lor bauz e lor queroles; li damoiseil i poignoient lor chevax, li champion i donoient les cox l'empereor², e li bacheler i jooient a l'escremie as borreaus e as

1. ラテン語原本は先にあげたミュレの刊本に収録されたものを使用した。これは、十世紀に帰属させられる最古のラテン語版写本を底本としている。以下で「ラテン語版」と呼ばれるのはこのテキストである。なお、ベテルサンが言及している「モンブリティウスの[……]ラテン語版」とは、この写本とほぼ同じテキストが1479年にミラノで刊行されたものである。ミュレはこの刊本に見られる異文(variante)も批判的注記(note critique)に収録している。

ところで、「ラテン語版」からの引用の際は、「散文版」からの引用と同様、節番号と行番号を指示した。この節番号は「散文版」の区切りに従ってミュレが付したもので、写本の区切りを反映したものではない。従って、「散文版」と「ラテン語版」の節番号は常に一致している。

2. 翻訳ではこのl'empereorを状況を示す被制格ととった。古仏の被制格は「現代語ならば前置詞を必要とするであろうような状況補語(位置、時間、広がり、歩き方などの)」を表現することができた。ところで、l'empereorをli championの所有者を表す被制格ととることもできなくはないが、li championとl'empereorの間が開き過ぎているように思われる。所有を表す被制格は限定を受ける語の直後に置かれるのが普通である。

talevaz: por tex jeus e por autres s'assembloient iluec as festes cil de la cité. [xxxv. 22-28]

闘技場はローマ市中でも極めて広い広場だったが、そこでは若武者達が一騎打ちの試合をしたり、乙女達がダンスや舞踏を踊ったりしたものだったし、また、若者達が馬に拍車をかけ、それに対して皇帝の眼前で剣闘士が一撃を加えたり、防具と木の盾を身につけた見習い騎士たちが一騎打ちの練習をしたりもした。そうした試合やその他の催しのために、街の人々は祭日のたびにこの広場に集まって来るのだった。

「ラテン語版」で上の条りに対応するのはただの一語 *arenam* (<*arena*) だけである。もちろん、他にも小さな異同は数多くあるが、それらの多くは曖昧な箇所を説明したり、抽象語を平易化するためにつけ加えられたものである¹。

一方、「韻文版」の方は明らかに直訳とは言いがたい。「ラテン語版」との対応関係は「散文版」のようにはっきりとは見て取れない。また、物語の展開に影響を与えるほどではないものの、決して細かいとは言えない変更が何か所にも見受けられる。たとえば、vv. 1-30には、他の二版には見られないプロローグが付されている。また、vv. 788-802 [xiii]では、ユスタッシュの妻の美貌が描写されるが、これも「韻文版」独自のものである²。さらに、「ラテン語版」の記述を大幅に拡大している箇所としては、vv. 41-68 [i] (戦場でのプラキドゥス)、vv. 775-784 [xiii] (船出の様子) などがある。これ以外にも直接話法の科白が加えられたり(vv. 567-874 [viii])、間接話法が直接話法に書き換えられたり(vv. 1217-1228 [xxii])といった変更が多数見られる。

それゆえ、「韻文版」が「散文版」をもとに書かれたと想定するのも、一見可能に思われる。実際、両俗語訳に共通し、かつ「ラテン語版」には見られない条りもなくはない。たとえば、*Erat enim venatione industris omnibus diebus.*[i, 15-16] (彼は毎日、熱心に狩りを行っていたからである) に対応する俗語版の訳文は次の通りである。

Cf. Philippe Ménard, *Syntaxe de l'ancien français*, Bière, Bordeaux, 1988, pp. 21-23

1. たとえば、*providentia Dei* [ii., 10] (神の摂理により) は、*si com Deus le vost* [ii., 16] (神がお望みになるとおりに) と平易化され、*non sicut Corneliū per Petrum* [iii., 5-6] (コルネリウスがペテロによって [改宗したように] ではなく) という幾分不親切な条りには、*ne mie si com il converti Cornille le haut home, par la bouche Saint Pere,* (神が聖ペテロの口を介して、高貴な男コルネリウスを改宗させたのとはまるで違って) [iii. 7-9] というように説明が加えられている。

2. なお、行番号の後の[]内のローマ数字は、「ラテン語版」および「散文版」の該当箇所を節番号で示したものである。ミュレの刊本では両版の詩節番号は常に一致する。

De chiens e d'oiseaus savoit il quant qu'il en estoit, de bois, de riviere e de gibecier: en ce s'estudioit il chascun jor. [i. 22-24]

彼は獵犬や鷹のこと、森のことや川のこと、そして狩りをするに何
でも知っており、毎日それらのことに熱意を注いでいた。

Mont estoit sages de cachier, /De berser et de rivoier. /De chiens, d'oiseax, d'autres deduiz /Des enfanche iert bien entenduiz. [vv. 91-94]

彼は獲物を追ったり、弓を射たり、水鳥を狩ったりすること、また獵犬や鷹のこと、そ
の他の気晴らしについて、豊かな知識を持っており、子供の時からそれらに熱心であっ
た。

ここでは、「ラテン語版」には見られない獵犬や鷹、森や川での狩獵¹、ユスタッ
シュの狩りに関する知識が言及されている。また、*dont vos avez oï devant [xviii, 1-2]*（あ
なたがすでにお耳にされた）、*ce vos ai ja dit [v. 1051]*（既に申し上げましたとおり）と
俗語訳が述べる箇所、*「ラテン語版」*には「語り手」の介入が見られない。

だが、一見重大な意味を持ちそうなこうした共通要素は、実際には偶然の産物でしか
ない。まず、「語り手」の介入に関して言えば、これは *illius (<ille) [xviii, 1]*（あの）と
いう指示語を、説明的に訳した結果に過ぎない。一方、前の事例の方は、当時の通念と
いうものを考えれば偶然の一致とさえ言えないだろう。中世フランスの人々にとって、
venatio（狩り）という言葉が、貴族階級、すなわち騎士という概念と結びついた場合、
連想される事柄はおおむね決まっていた。たとえば、武勲詩にも狩りの場面はよく見ら
れるが、その際にも、必ず鷹や犬は言及されるし、また狩獵の場所もおおむね森か水辺
に決まっている。また、「ラテン語版」が直接にはユスタッシュの狩りの知識に言及し
ていないのが事実だとしても、毎日熱心に狩りを行っていたら、それにまつわる知識が
身に付いているのは当然である。

したがって、「ラテン語版」に存在しない要素が共有されているからと言って、二つ
の俗語訳に縁戚関係を認める必要はない。それどころか、「韻文版」が「散文版」から
独立を保っていると信じるに足る根拠が三つ存在する。すなわち、第一に、少なくとも
訳語のレベルでは、「韻文版」の方が「散文版」よりも原語を尊重した翻訳を行って

1. 「散文版」の「森のことや川のこと [を知っている]」は、「獵犬や鷹のこと」と「狩りをする
こと」に挟まれている以上、森や川での狩獵のノウハウを知っているということであろう。

いる場合がある。たとえば、「ラテン語版」の *commovebitur* (<*commoveo*) [VIII, 15] に対し、「散文版」は *guerroiера* (<*guerroyer*) [VIII, 17]、「韻文版」は *commovra* (*commover*) [v. 607] を用いるといった具合である。とはいえ、そうした事例はそれほど多くない。むしろ、決定的なのは残る二つの根拠である。

「韻文版」の独立を信じるに足るものとする第二の根拠は、「韻文版」が「散文版」の誤訳を共有していないということである。その誤訳は、長い苦難の生活の後將軍に返り咲いたユスタッシュの閲兵の場面に見られる。

il mercha chascun e seigna en l'espaule. [XXVI, 9]

彼 [ユスタッシュ] は [集められた新兵たちの] それぞれの肩に十字を切った。

この部分の「ラテン語版」は *taxavit in numeros* [XXVI, 7] (人数を見積もった) であるが、校訂者のミュレが指摘する通り、訳者は *numeros* (数) を *humeros* (肩) と誤解した。むしろ、それでは意味が通じないのだが、訳者は強引に訳文を捻出した。その結果が上の条りである。この誤訳はうまく文脈に合致したため、同系列のすべての写本はおろか、古スペイン語版(「散文版」からの孫訳)にも、*el feso una sennal a cada uno en las espaldas* (彼は一人一人に対し、肩に十字を切った) という文章が見られる¹。しかし、「韻文版」はこの誤訳を共有せず、*Au senescal sont amené / Por eulz veoir et por esmer* [vv. 1460-1461] (彼らを見て、評価できるように、將軍のもとに新兵たちが連れられてくる) としている。ここでは、*in numeros* に該当する表現はないが、それは *esmer* (評価する) に吸収されたのであろう。その意味では「韻文版」の訳も厳密なものとは言えない。だが、「散文版」では *taxavit* (見積もった) という語がまったく訳されていない以上、「韻文版」の *esmer* という訳語が、「散文版」から生じ得ないのは確かである²。

さて、「韻文版」と「散文版」が無関係に成立したと考えられる第三の根拠は、両版

1. Jessie Murray, *op. cit.*, p. 52に原文が引用されている。

2. 他の共有されない誤訳の例: 「ラテン語版」の *longius remotus est a suo exercitu* [II. 12] (ブラキドゥスは自分の軍勢から一層遠くに離れてしまった) を「散文版」が *e ja fu li cers mult esloigniez de tote la compaignie*, [II., 19-20] (そして、鹿は随分遠く、自分の群から遠ざかってしまった) としているのに対し、「韻文版」は正しく *Comment des autres chevaliers / Placidus, ... / Esloignout mont enz el boscage* [vv. 210-213] (どのようにしてブラキドゥスが、他の騎士たちから、茂みのなかで極めて遠く離れ、) としている。

の基づいていた「ラテン語版」が、どうやら異なった写本系列に属するものだったらしい、ということである。

獣にさらわれて消息を絶った息子達が、ユスタッシュ率いるローマ軍勢に徴発された経緯は「ラテン語版」では次のように語られる。

Cuncti vero ejusdem civitatis cultores illos duos juvenes, quippe ut peregrinos
decerentes, tradunt **expetitionem facientibus**. [xxvi., 2-4]

その街の農夫達は皆、あの二人の若者を、異国人として区別し、望む者たちに引き渡したのである。

ここでの「望む者たちに(*expetitionem facientibus*)」が誰を指すのかは、極めて曖昧である。もちろん、「兵士を欲しがっている者たち」と考えることもできなくはないが、むしろ、「望む者たちを(*expetitionem facientes*)」と取り、若者達もまた喜んでローマ軍に参加したとする方が自然であろう。事実、「散文版」の訳者はそう解釈したのである。

l'en i envoiait les deus jovenceaus por ce qu'il estoient avolé e estrange; e il i
alerernt volentiers por ostoier, [xxvi., 3-6]

人々はあの二人の若者達をローマに送った、というのも彼らは拾われた子供であり、異国人だったからである。そして若者達の方も喜んで、戦いに赴いたのである。

ここでは、若者達は誰かに引き渡されたのではなく、ローマに送り届けられている。そして、彼ら自身喜んでそこに出向いている。「望む者たちに」という与格を「散文版」が対格（「望む者たちを」）にとったのは確かであろう。そして、その解釈は「ラテン語版」以上に文章の流れをすっきりとさせている。とはいえ、それはミュレが底本としたラテン語写本に関してでしかない。刊本に付された批判的注釈(*note critique*)を検討してみると、先の条には異文(*variante*)が存在している。すなわち、ミュレの底本は仏国立図書館所蔵のラテン語写本5577 (fo 3-15)であるが、その写本の*expetitionem facientibus*を、大英博物館のArundel 91写本は*expeditionem facientibus*（遠征を行う者たち＝遠征隊に）としている。そして、「韻文版」は、明らかにこの異文に基づいて訳文を作っている。

Mes dont il ierent ne savoient, / Ne mes que norriz les avoient. / Por cen les ont
apareilliez / Et en l'ost ronmain envoiez. [vv. 1453-1456]

しかし、人々は彼らの出身を知らなかった。ただ彼らを育てただけなのだ。そう
いうわけで、人々は若者達の身支度を整えてやり、ローマ軍勢に送り届けた。

ここでは、若者達が喜んで遠征隊に参加したことも、彼らがローマに赴いたことも言
及されない。彼らはローマ軍つまりは遠征を行う者たちに送り届けられたのである¹。

以上のことから、「散文版」と「韻文版」の、いずれか一方が他方の原本となり得な
いのは確実である。むろん、翻訳の際に、いずれか一方の訳者が他方の版を参照した可
能性までは否定できない。しかし、以上の考察により、両版の間に大きな影響関係がな
いということも確かなことであろう。

3. 俗語訳とラテン語版の関係

「散文版」が「ラテン語版」に直接基づいていることに関しては異論を挟む者はない
だろう。両者の間に別の俗語訳が介在したとすれば、次のような厳密な対応関係はまず
生じないように思われるからである。

«Confide, Eustachi, in praesenti enim tempore remeabis ad tuum priorem statum et
accipies uxorem tuam et filios. In resurrectione enim majora videbis **eternorum bonorum
delectationem** repperies et nomen tuum magnificabitur in generationes generationum.»
[xxi, 1-5]

「ユスタッシュよ、信じるが良い。なぜなら、すぐにもお前はかつての境遇に戻
ることになり、妻と息子たちを迎えることになろうからだ。それに、復活の日には
さらに偉大なるもの、素晴らしき永遠の喜びを見いだすことにもなろうし、お前の
名前は幾世代にもわたり、賞賛を受けることにもなろうからだ。」

«Eustaces, soies assure, car tu revendras en brief tens en ton ancien estat e ravras ta
fame e tes enfanz, e au jor de la resurrection verras assez greignor choses, car tu avras **vie
pardurable e la joie de paradis** e tes nons sera essauciez par tot le monde tant com il
durra. » [xxi, 1-7]

1. すでに述べたとおり、ベテルサンは「韻文版」の直接の源泉を「モンブリティウスが刊行し
た『聖ユスタッシュ伝』のラテン語版」だとしているが、ミュレの批判的注記によれば、モンブ
リティウスの刊本では問題の条り自体が脱落してしまっている。それゆえ、ベテルサンの上の言
葉を厳密なものと考えるときではあるまい。

「ユスタッシュよ、信じるが良い。なぜなら、まもなくお前はかつての境遇に復帰し、妻と息子たちを取り戻すことになるだろうからだ。そして、復活の日にはさらに偉大なるものを目にするようになるだろう。というのもお前は永遠の命と天上の喜びをも手に入れて、お前の名前はこの世界の続く限り世界中で賞賛されることにもなるだろうからだ。」

上の事例を見ても分かるとおり、「ラテン語版」と「散文版」の大きな相違はただ一つ、*eternorum bonorum delectationem*（素晴らしき永遠の喜び）に対応する訳語が、*vie pardurable e la joie de paradis*（永遠の命と天上の喜び）というように二つの部分からなっていることである¹。「散文版」では、こうした原語の「二重化」がかなりの頻度で行われる。とはいえ、こうした「二重化」が「ラテン語版」と翻訳の対応関係を損なうものでないことは確かであろう。二つの訳語自体が「ラテン語版」のどの語と対応しているかが明瞭だからである。一方、「韻文版」は「ラテン語版」をかなり自由に訳している。先の引用に対応する箇所は次の部分である。

«Frere, ne t'esmaier, / K'a briés termes doiz repairier / A tom premeraim estement / **Et converser avec ta gent.** (1) / A grant richesse revendras, / Ta fame et tes fix trouveras, / Et en la resurrection / **Avras mont greignor guerredon,** (2) / Et mont greignors choses vesras, / Kant ensemble o Dieu regneras, / Et le tuen non si grant sera / Ke tous jors mes san fin durra. » [vv. 1159-1170]

「兄弟よ、気を落とすことはない。というのも、まもなくお前は最初の境遇に戻り、仲間とともに暮らすこと(1)になっているからだ。お前は再び非常に豊かになり、妻と息子を見つけることになるだろう。そして、復活の日にはさらに大きな褒美を手に入れ(2)、さらに大いなるものを目にし、神とともに誉れをもって生き、お前の名は偉大なものとなり、終わることなく何時までも名を残すことになるからだ。」

ここでは「散文版」のような「ラテン語版」との厳密な対応関係は存在せず、「韻文版」は文(2)や不定法句(1)を独自に導入している。また、*Kant ensemble o Dieu regneras*（お前は神とともに誉れをもって生き）というのは、*eternorum bonorum delectationem*（素晴らしき永遠の喜び）の言い換えとしては若干ひっかりを感じる。確かに、具体的に言えば、そういうことになるだろうが、「散文版」では*joie*で表されていた、*delectationem*

1. *par tot le monde tant com il dura*も表現そのものは変化している。だが、これが*in generationes generationum*を分かり易く言い換えただけのものであることは明白である。それゆえ、両者の間には一対一の対応を認めることができる。

(喜び) という要素がここではすっぱり抜け落ちてしまっている。むろん、神とともに生きることが喜びを伴うのは当然だとしても、それを明確に表現するか否かには大きな違いがあるように思われる。いずれにせよ、これほどに自由な言い換えがなされているのであれば、厳密な俗語訳(「散文版」以外の)に従って「韻文版」が作り出されたということも大いにあり得そうである。しかし実際には、そうした可能性はほとんど皆無である。というのも、「韻文版」の一部の固有名詞にはラテン語の格変化が見られるからである。すなわち、プラキドゥス(Placidus)とイエス(Jhesus)の名は、ラテン語の文法規則に則ってほぼ完璧な語尾変化を行っている¹。また、すでに引用した条りを見ても、「韻文版」が「ラテン語版」との対応関係を全く失っているのではないことは明らかであろう。さらに、以下に述べる事実も我々の見解を裏付けてくれるように思われる。まずは、「ラテン語版」から検討してみよう。

ユスタッシュは遠征隊に送られてきた二人の若者を、自分の息子達とは気づかないままに特別扱いして可愛がるようになる。その理由は次のように説明される。

naturale affectu impulsus amore eorum... [xxvi., 10]

自然の情動につき動かされて彼らを愛し、……

ここでの *naturale affectu* という表現はきわめて訳しにくい。これは“愛情の原因”であって、“愛情そのもの”ではない。その意味で今日の精神分析用語 *affect* (情動、欲動) と重なるような概念である。むろん、中世の俗語には、そうした抽象概念に対応する語は存在しなかった。それゆえ、俗語で上の条りを訳すのには最初から無理がある。実際、「散文版」の訳者も抽象概念を説明するには努力を惜しまないのだが、この条りだけは逐語訳を放棄している。彼はユスタッシュが若者達を愛するようになった経緯を次のように説明している。

1. これについては別の機会に論じたので、その結論だけを述べておくと、「韻文版」における *Jhesus* と *Placidus* の格変化はほぼ完全にラテン語文法に従っている。また、「ラテン語版」の格変化は可能な限り温存されている。つまり、「韻文版」の訳者のラテン語能力に疑義を差し挟むことはできないし、また、彼が「ラテン語版」をある程度尊重したということもわかる。こうした事実は、「韻文版」が「ラテン語版」から直接翻訳されたものだという仮説を支持している。Cf. 「韻文版『聖ユスタッシュ伝』における固有名詞の格変化——〈韻文版〉とラテン語原本の関係についての一試論——」、大阪市立大学福島研究室発行、*TLLMF* 7号、1996年12月発行予定

establi il toz premiers a lui servir, car il les conut a franz homes e a gentix et de cuer
e de cors, ses prist a amer... [xxvi., 11-14]

ユスタッシュはこの若者たちを自分に仕える側近とした。というのも、彼らが心も体も気高く優美であることを見て取ったからだ。そして彼は若者たちを愛するようになり、……

つまりは、接するうちに情がわいた、というわけである。一方、「韻文版」の作者は問題の糸りをかなり巧妙に表現しているように見える。

La paternel affection / I atornot mont sa raison / A eulz amer, et neporquant / Nes
conoissoit ne tant ne quant. [vv. 1471-1474]

父性的な情動が彼らを愛することに（ユスタッシュの）心を砕かせたが、彼は彼らの正体を少しも知らなかったのである。

「ラテン語版」の「自然の情動」を「息子を、それとは知らずに父的に愛しようとする情動」とし、*naturale affectu*に対応させて*la paternel affection*という訳語を当てたのである。だが、我々の目には巧妙に見えるこの訳語は、実はかなりアクロバチックである。まず、「韻文版」の訳者は「ラテン語版」の*affectu*と語源的に直接結びつく、*affect*や*affecte*を用いていない。その理由は明白である。これらの語は、ゴドフルワによれば、次のような語義を持つ。

AFFECT: affection, sentiment, passion, désir
AFFECTE: affection, sentiment¹

つまるところ、「韻文版」の訳者は「愛情の原因」ではなく「愛情」そのものを意味するこの二語を避けたわけである。そして、語源的には間接的に結びつく*affection*が*affectu*の訳語として採用された。この*affection*の語義は以下の通りである。

1. Frédéric Godefroy, *Dictionnaire de l'Ancienne Langue française et de tous ses dialectes du IX^e au XV^e siècle*, Champion, Paris, 1880-1902, Kraus Reprint LTD, Vaduz, 1965

なお、**AFFECT**の方には*disposition, situation, état bon ou mauvais, effet produit par l'impression des choses extérieures*という語義も与えられている。簡単に言えば「影響（の結果）」ということであるが、ここでは余り関連がないので本文中では割愛した。

AFFECTION: modification agréable ou pénible que l'âme ressent, mouvement qui porte l'âme vers une chose ou qui l'en éloigne¹

「魂が与える心地良い、もしくは苦々しい変化の印象、魂をあるものに引きつけたり、引き離したりする動き」という難解かつ抽象的な定義が意味するのは次のことである。すなわち、*affection*は精神に愛情と同様、憎悪をも引き起こし得るような一つの動き、変化なのである。それゆえ、「韻文版」の訳者は*affectu*の概念を表すのに非常に適切な訳語を選んだことになる。とはいえ、それはあくまで理屈の上でのことである。というのも、ゴドフルワが*affection*を愛情と憎悪のいずれにも結びつくとしたのは、この語が次のように用いられるからである。

Veuillanz perseverer en **la bonne affection** que nos predecesseurs ont toujours eu aus eglises de nostre royaume. (1337, A. N. JJ 70, fo 144 ro.)

我々の先人達がわが国の教会に対して常に持ってきたような、良き心の姿勢をもって遂行しようではないか。

同様にオヴィディウスの『恋愛術』の俗語訳にも**bonne affection**という表現が見いだされる。そして、その他の用例でも、*affection*は肯定的な意味を持つ語と並列されている。つまり、*affection*自体が常に肯定的な意味を持つかどうかは不明である。だが、*mauvaise affection*なる表現もしくは、それに該当する表現の用例は辞書には記載されていない。それゆえ、*affection*が愛憎いずれにも結びつくというのは、現実の用例を踏まえたものでない。それに、上の用例をみても分かる通り、*affection*は定義から予想されるよりは、ずっと具体的に用いられている。ゴドフルワが挙げた用例の中では、この語は*l'amor et l'affection, de devotion, de deleyt et d'affection, grant affection et volonté, intension tres grande et affection*といった具合に、愛情、敬虔さ・歓喜、やる気、積極的姿勢を表す語と結びついている。つまり、*affection*も感情や心のあり方そのものであって、それらの原因ではない。それゆえ、愛情そのものを表す*affect*や*affecte*を愛情の原因とするよりはましにしても、*paternel affection*なるものを愛情の原因とするのも無理がある。この表現を理解しようとするれば、結局「ラテン語版」を参照しなくてはならないだろう。

1. 前掲辞書参照。以下に続く*affection*の用例（イタリックは原文のまま、ゴシックは引用者による強調）も出典は同じである。なお、*affection*は辞書第七巻の補遺の方に記載されている。

ところでもし、「韻文版」が他の俗語訳に基づいた孫訳だとすれば、こうした難解な箇所は決して残り得なかったのではなかろうか。というのも、「散文版」と同様、「韻文版」も、詳細な説明、そして時には削除に訴えて、難解箇所を解消しているからである。

4. 「韻文版」と「散文版」の成立年代

校訂者たちによれば、言語や脚韻の特徴により、「韻文版」と「散文版」の成立年代は十三世紀半ば以前とされている。それはまず確実なことと思われる。それゆえ、ここで新たに成立年代を問題とするのは、ベテルサンやミュレに反論するためではない。むしろ、二人の研究者の主張をふまえて、十三世紀前半のどの時期に、これらの翻訳が成立したのかを検討するのが我々の目的である。

まず、「散文版」の方は散文で書かれているという事実からしても、十三世紀以前のものとは考えにくい。とはいえ、散文作品が大成功を享受し始めた時代よりは早くに、成立したもののようにも思われる。「散文版」の文体はきわめて特異だからである。すでに指摘したとおり、ここでは、一つの原語に二つの訳語を当てはめる訳し方が頻繁に用いられていた。むろん、類義語を二重に重ねる冗語法は、現代の文章にも見られる技法であり、中世においても珍しくはなかった。しかし、「散文版」ではその頻度が尋常ではない。たとえば、ユスタッシュが初めてイエスの顕現に接するきっかけとなる鹿が登場する場面は次のように訳されている。「ラテン語版」とともに検討してみよう。

Exeunte eo una die, **consueto more**, ad montes venare **cum omni exercitu et gloria**, apparuit ei grex cervorum depascens et, **disponens solito more exercitum**, eos contatur insequi. Cunctis vero militibus circa **captionem** cervorum occupatis, apparuit unus cervorum vastus ultra mensuram gregis totius et speciosus. Qui resistens a grege impetum fecit in silvam in spissioribus locis. [II. 1-7]

ある日、彼が通常の習慣に従って、全軍を率い警れを伴って、山中に狩りに出かけてきた時、草をはむ鹿の群が彼の前に現れた。そこで、いつもの通りに隊列を整えて鹿たちを追跡しようとする。ところが、全軍が鹿を捕らえるのに熱中していると、鹿のなかの一頭で、群のなかでもけた外れに大きく、美しいのが現れた。この鹿は、抵抗しつつ、群から離れ森の中でも最も木の茂ったところに跳び込んだ。

Un jor avint qu'il s'en issi, si com il avoit **en us e en costume**, as montaignes por

chacier a tot son esforz, a tot son baudoire, a tot grant compaignie de chevaliers, e vit tantost devant ses ielz une grant assemblee de cers qui peissoient; e il tantost del atirer ses compaignons par torbes e par eschieles; si corut grant aleure après les cers. Que que li chevalier entendoient a la chace e a la prise, ez vos un cerf plus bel e plus grant que tuit li autre, e s'en vint par devant lui e se parti de la compaignie as autres, e se feri el bois la dedenz la ou il estoit plus espés. [II. 1-12]

ある日、彼はいつもの習慣、習わしのように、狩り人たち全員と騎士の大軍勢全員を引き連れ、歓喜に満ちて山へと狩りに出かけた。するとすぐさま彼の眼前に、草をはむ鹿の大群が見えた。そこで彼はすぐさま軍勢を小隊と大隊に編成し、大急ぎで鹿たちの後を追った。騎士たちが鹿を追ひ、捕らえるのに熱中していると、そこへ見よ、他のものたちよりもひととき美しく大きな鹿が現れた。この鹿は彼の前までやってくると、他の鹿たちから離れ、森の中でも最も木の茂ったところに跳び込んだ。

ここではわずか12行に四カ所も上に述べたような冗語法が用いられている。そしてそのうちの一カ所では、二つの原語に対し三つの訳語が当てられている。一見、こうした事態は、適切な訳語をめぐって訳者が逡巡した結果だと見えるかも知れない。しかし、そうとは考えられないような事例も少なくない。たとえば、circumspiciens [III. 2] (回りを見回して) に対しては、regarda tot entor soi e environ [III. 2]が、ad se rediit [IV. 2] (彼は我に返った) に対してはil fu revenuz e il ot son cuer repris [IV. 4]が用いられている。どちらの場合も、重なった表現のいずれか一方で「ラテン語版」の言おうとすることが十分に伝わるのは明らかであろう。それゆえ、こうした表現の重複は、むしろ文体上の要請から意図的に行われたと考えなければならない。そしておそらく、このような事態は、訳者自身が散文で書くという事にあまり慣れていなかったために生じたと考えられる。散文よりも韻文の方が文学において地歩を固めていた時代にあつて、訳者が韻文に見られる冗語法を多用して散文の「文学性」を維持しようとした、というのは大いに考えられることである。むしろ、それが不要の配慮であることはやがて気づかれるであろう。実際、物語が展開するにつれて冗語法の使用頻度は低下して行くのである。さらに「散文版」が「ラテン語版」の直訳だということも、同様の事実を暗示しているように思われる。ラテン語原本に基づく韻文作品（『聖アレクシス伝』や『エネアス物語』）は、物語の筋立てそのものは温存するにしても、もっと自由に物語を展開している。「散文版」の作者はそうした自由を謳歌するほどには、散文の「文学性」に確信を持てなかったのではないだろうか。こうした推測が正しいとすれば、「散文版」は、なおも散文が文学語として確立されていなかった時代、すなわち十三世紀のはじめ

頃に成立したと考えられる。

一方、「韻文版」の方は、十二世紀の成立を思わせるような特徴もないわけではない。平韻八音綴で書かれたこの作品では、同一脚韻を踏む二行一組で一文を組み立てる伝統的な韻律法——《クプレ(couplet)》——が意外によく守られているからである。これはクレティアン以降では幾分古びた規則であった。だが、「韻文訳」がクレティアン以前の作品でないことも確かである。この作品では、《クプレ》が尊重される一方で、句送りの技法(rejet)も多用されている。この技法を、少なくともかなり目立ったやり方で最初に用いたのは、クレティアン・ド・トロワである。十二世紀の最後の四半世紀には、詩法は次のような状況にあった。

実際、彼〔クレティアン〕までは《クプレ》、すなわち、脚韻と意味を同時に統合する二行ごとの詩行グループは専制君主的な力を振るい続けた。そうした《クプレ》を以下にも見ることができる。

Por la dolçor del tans serain / Osta au chaceor son frain,
Si le leissa aler peissant / Par l'erbe fresche verdoiant.
(*Conte du Graal*, vv. 23-26)

穏やかな天気心地よさゆえに彼は馬の口からハミをはずした。
そして、青々としている真新しい草地のあちこちへ馬を食事に行かせてやった。

クレティアンの時代、すなわち1170年までは、ロマンの八音綴詩行は、二行ごとに結びついた詩行から来るこのような単調さを持ち続けたままであった。

こうした詩法においては句送り(rejet)は希であるし、それはクレティアンにおいてさえも同様である。¹

さて、ドゥ・ラージュが、ここでどのような技法を句送り(rejet)と呼んだのかを見ておこう。というのも、中世の詩法は現代のそれとはかなり異なっており、「句送り」と言っても、普通に想像されるものとは異なっているからである。

Ce fu el tans qu'arbre florissent, / Foillent boschaige, pré verdissent,
Et cil oïsel en lor latin / Dolcement chantent au matin,

1. Guy Raynaud de Lage, *Manuel pratique d'Ancien Français*, Picard, Paris, 1983, p. 237 なお、ドゥラージュが引用しているのは、*Conte du Graal* の第23-24詩行だけである。引用に際し、指示だけされている25-26詩行も一緒に訳した。また、引用文は《クプレ》の効果を捉えやすくするために二詩行を一行にまとめた。

Et tote riens de joie enflame, / Que li filz a la veve dame
De la gaste forest soutainne / **Se leva**, et ne li fu painne
Què il sa sele ne meïst / Sor son chaceor et **preïst**
Trois javeloz, et tot ensi / Fors del manoir sa mere issi,...
(Le Conte du Graal, vv.1-12)¹

木々に花が咲き、野が青々とし、
鳥たちが自分たちの言葉で、朝に優しく歌い、
あらゆるものが喜びに燃える季節に、かの未亡人の奥方の息子は、
(奥方は人も通わぬ荒れ果てた森に住んでいたのだが) 起きあがって、やすやすと
鞍を狩り用の馬の背に据え、手には持つ
三本の投げ槍を。そしてそのようにして、自分の母親の住処を出たが……

上の条りでは、「かの未亡人の息子」、すなわちベルスヴァルの「起きる」という動作は主語が現れてから二詩行後にならないと、また彼の「手にもつ」という動作の対象(三本の投げ槍)は次の詩行にならないと、現れてこない。つまり、主語と述語動詞、述語動詞と直接目的補語が分断されている。ここで重要なのは、その分断のために、切り離された二つの要素が異なった脚韻をもつ詩行に属することになるという事実である。先のドゥ・ラージュの言葉にもあるように、クレティアンの時代までは同一の脚韻を踏む二詩行で一文を構成するのが規範だったから、こうした規則違反は極めて衝撃的であった。つまりは、この技法の本質は“文法的あるいは意味的に必須の要素が脚韻の変更後にしか現れない”という点にある。これは、現代の句送り²とはかなり異なる定義である。それゆえ、ドゥ・ラージュは、「韻律上の断絶(rupture du rythme)」という名称を用いもするのだが、ともかく、我々が問題とするのは上のような技法のことである。

さて、上にあげたような「韻律上の断絶」は先のドゥ・ラージュからの引用にもあるように、クレティアンの作品においても希である。それに対し、「韻文版」での句送りの使用はかなりの頻度にのぼる。しかも、時にはきわめて効果的に用いられている。とはいえ、そのように句送りを用いることのできた「韻文版」の訳者が、《クプレ》の規則を比較的良好に遵守したのは、決して奇妙なことではない。というのも、おそらく、彼にとって重要だったのは、規則を守るのではなく、ここぞという場面で規則を破ることにあつたからである。たとえば、次のような条りがその「規則破り」の好例である。

1. Guy Raynaud de Lage, *ibid.*, p.228 ただし二詩行を一行にまとめ、強調を行ったのは引用者である。

2. 詩句を完結させるべき一語(まれには二語)を次行の初めに送ること。(「小学館ロベール仏和大辞典」、rejetの項より)

«Beneiz es por chem qu'as pris / Le baptesme que je te dis.
 Orr as sormonté le deable, / Son enchantement et sa fable.
 Despoillié as honme mortal / Et as vestu l'esperital.
 Dessormes t'estuet essaier / Con tu seras mon chevalier,
 Ke li deable **conmovra** / Encontre toi, quamqu'il porra,
 De toutes pars **sa grant envie**, / Por cen que as sa loi guerpie.
 Mainte chose t'estuet souffrir / Por cen que puissiez **parvenir**
A la joie de paradis, / La ou seront **touz mes amis**
En grant richessesche eslevé. / Or soufferras **grant pouvreté**,
Aprés vendras a grant richesce / Et enn asez greignor nobleche.
 Garde ne perdez ta vertu. / A la ricesce qu'as eü
Ne te chaille ja regarder / **Ne ne t'en voille nis membrer**.
 [vv. 599-622]

私の命じた洗礼を受けたお前は幸いなるかな。
 今やお前は、悪魔と悪魔のまやかしとごまかしを乗り越えたのだ。
 お前は死すべき人間〔の肉体〕を脱ぎ捨て、霊的なものを身にまとったのだ。
 私に仕える騎士となったからには、お前は苦難を味わわねばならぬ。
 すなわち、悪魔がお前に対し、でき得る限り、掻き立てるだろう
 あらゆる面にわたる悪意を、というもお前は彼への信仰を捨て去ったからだ。
 多くの事をお前は耐えねばならぬ、さすれば、お前はついには手にするであろう
 天国の喜びを、天国では私のしもべの誰しもが
 大いなる豊かさの中で称揚されるのだ。さあ、大いなる貧苦に耐えるが良い、
 その後には大いなる豊かさを手に入れ、そのために一層の誉れを得るであろう。
 良き心を失うな。お前がかつて手にした豊かさへ
 目を向けるべきではないし、それを思い出そうともしてはならない。

“これまでの経緯”という、ユスタッシュにとっても読者にとっても既知の事実が語られる最初の六詩行（引用では三行）では、二詩行ごとに文が完結し、〈クプレ〉は完全に維持されている。ところが、イエスが、“今後の運命”という未知の事実を語り始めるや、突如として韻律が崩れる。続く二詩行は一文をなさず、その次の二詩行で最も重要な要素、「悪魔の悪意」は、更に脚韻が変わった後でしか現れない。ここでは六詩行が一文をなしているのである。韻律の崩壊はさらに続く。次の一文は五詩行を占める。ここでは、「天国での喜び」、「称揚」といった要素が脚韻の変更後に現れて強調される。ここまで来ると、校訂者ベテルサンが、Or soufferras grant pouvreté（さあ、大いなる貧苦に耐えるが良い）の後にポワンではなく、ヴィルギユルを打ち、次の詩行に文を連続させたのもよく理解できよう。〈クプレ〉の規則に従って、ポワンを打ち、文章を一旦終え、続く二詩行を独立した一文とすることも、この場合は可能である。だが、

ヴィルギユルを用いて、後の二詩行を脚韻の変更後に先送りされた重要な要素ととらえた方が文脈に沿った解釈（校訂）だと思われる。というのも、「韻律の断絶」はなおも続いており、引用の最後の一文は上の場合と同様、重要な要素を二詩行にわたって展開しているからである。

さて、上のイエスの言葉の意図は明白である。句送りで強調されている部分をつなぎ合わせれば、当面は“悪魔の憎しみ”がやってくるが、後には“喜びと誉れ”が続く、だから今はかつての恵まれた生活を“思い出すな”ということになる。つまり、表現が悪いかも知れないが、ここでイエスは苦難と天国の喜びという、いわばアメとムチを差し出し、ユスタッシュを手なづけているのである。もし、直前の〈クプレ〉がなければ、そうした意図は十分には強調されなかったであろう。逆から言えば、「韻文版」の訳者にとっても、〈クプレ〉の規則そのものは古びたものだったのであり、それは韻律上の「事件」を際立たせるための「背景」にすぎなかったのである。それゆえ、〈クプレ〉の遵守をもって「韻文版」の成立年代を十二世紀に位置づけるのは不適切である。むしろ、句送りの頻度とその効果的な用法は、この版が、「散文版」と同じく十三世紀初めに成立したことを示唆している。

4. 結論

以上の考察により、『聖ユスタッシュ伝』の「韻文版」と「散文版」は、おそらく、十三世紀の初頭頃に成立した、「ラテン語版」からの新訳だと考えられる。それゆえ、両版を比較検討することで、草創期の散文と韻文の共通点と相違点を知ることができよう。なお、我々の結論は、「ラテン語版」としてすでに十世紀に存在していた『聖ユスタッシュ伝』が、十三世紀においても、なお新訳を試みられていたことを意味する。言い換えれば、十世紀にラテン語で語られた物語が、十三世紀においてもなお今日性(actualité)を保ち続けていたのである。とはいえ、我々の当面の興味からははずれる、この主題については、すでに別の機会に論じた¹⁾。それゆえ、我々の今後の課題は先に述べた「散文版」と「韻文版」の比較検討と言うことになろう。そして、両者の文体考察の一端は、すでに上記第三節に示されもしているのである。

1. 「二人の主人公：アレクシスとユスタッシュ」、和歌山大学紀要1996年度号所収